

詩篇42-45篇 「絶望の中で」

1A 神への渇き 42

1B 生ける神への渇き 1-5

2B 圧倒的な敵の虐げ 6-11

2A 聖なる山への渴望 43

3A 立ち上がろうとする者たち 44

1B 昔の偉大な御業 1-8

2B 物笑いの種 9-19

3B 主にへばりつく懇願 20-26

4A 王の麗しさ 45

1B 王の尊厳 1-9

2B 王の娘たち 10-17

本文

詩篇 42 篇を開いてください。私たちは、今回は病の中にある弱さとの闘いの詩篇を読んできましたが、42 篇から、午前中に学びましたように鬱との闘いにある詩篇を読んでいます。鬱は現代病と言われていますが、実に詩篇の中に、また聖書人物の中に見いだされる症状であります。

1A 神への渇き 42

1B 生ける神への渇き 1-5

42 第二巻 指揮者のために。コラの子たちのマスキール

これまで、第一巻の多くの詩歌はダビデによって書かれたものでした。けれども第二巻から、このように「コラの子」によるものが多く出てきます。レビ族のケハテ族の中にコラがいましたが、アロンとモーセに反抗して、生きたまま割れた地の中に入れられました。けれども、生き残っている息子たちがいました。彼らが後に、ダビデによって礼拝賛美の奉仕を任せられます。そして、ヨシャパテ王が、アモン、モアブ、そしてエドムの大軍と戦う時に、彼らとその戦いの前線にて力いっぱい主を賛美している姿を見ます(2歴代 20:19)。

そして、コラの子らが導いている詩歌は、おそらくバビロンに捕え移された民の痛み悲しみを歌ったものと思われます。ダビデ自身の苦しみも投影していると思いますが、それ以上にバビロンによって、遠く祖国から引き離された、神を求める残りの民を代表していると思われます。そこから出てくる絶望の思い、それが今日学ぶ箇所背景です。

42:1 鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえます。42:2

私のたましいは、神を、生ける神を求めて渴いています。いつ、私は行って、神の御前に出ましようか。42:3 私の涙は、昼も夜も、私の食べ物でした。人が一日中「おまえの神はどこにいるのか。」と私に言う間。

今、著者は異教徒たちがいる環境の中にあります。「おまえの神はどこにいるのか。」という言葉を一日中聞いているというのは、神の民のおるべきところから離れて、神を敬わない人々のところに囲まれていることを示唆しています。そこで、これまでになく生ける神に対する渴望が強くなっています。

42:4 私はあの事などを思い起こし、御前に私の心を注ぎ出しています。私がああ群れといっしょに行き巡り、喜びと感謝の声をあげて、祭りを祝う群集とともに神の家へとゆっくり歩いて行ったことなどを。

「あの事」というのは、彼がエルサレムにいた時の話です。これの原型は、ダビデの逃亡劇にあるでしょう。ダビデが息子アブシャロムのクーデターによって、エルサレムから出ていかなければいけませんでした。そして、彼はエルサレムに神の箱を動かすために、行列を作って喜び踊りながら少しずつ歩いていきました。神の民と共にいる時の、神の臨在が今まったくありません。この時に抱く神への渴きを、バビロンによって約束の地から引き抜かれたユダヤ人も抱いていたのです。

42:5 わがたましいよ。なぜ、おまえは絶望しているのか。御前で思い乱れているのか。神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。御顔の救いを。

午前礼拝の説教をぜひお聞きください、絶望また鬱への処方箋について話しました。一つは、自分自身の魂に語りかけるということです。落ち込んでいる時には、私たちは自分の思いに対してその絶望をなすがままにさせています。それで、自分自身に語りかけ、「お前は何をしているのだ。」と叱咤しなければなりません。そして、最も大事な言葉が「神を待ち望め」です。人に対して、いや自分自身に対しても期待をすれば落ち込みます。神に希望を置きます。

それを行なえば、次に、「私はなおも神をほめたたえる。」といえます。ここで大事なのは、「なおも」という言葉です。絶望していても、なおも神をほめたたえます。神に希望を置く時に、絶望を乗り越える賛美の力が与えられます。そして、「御顔の救い」とありますが、これは神が私たちにご自分の顔を向けてくだされば、顔を向けてくださるだけで私たちに救いが来るということです。それは、私たちに恵みと平安を与える顔であります。

2B 圧倒的な敵の虐げ 6-11

42:6 私の神よ。私のたましいは御前に絶望しています。それゆえ、ヨルダンとヘルモンの地から、またミツアルの山から私はあなたを思い起こします。

これは、著者が今、ヨルダンとヘルモンにいたことを示唆しています。ミツアルの山とはどこにあるか分かりませんが、その意味は「小さいもの」です。ヨルダンはヨルダン渓谷であり、イスラエルの中では最も低いところですが、そしてヘルモンはイスラエルの中で最も高いところですが、けれども、エルサレムから離れています。つまり、神から離れたところにいれば、最も高い所においても最も低いところにおいても絶望には変わりない、ということです。人生の中でどこにしようが、神から離れているのであれば全く同じであるということが出来ます。

42:7 あなたの滝のとどろきに、淵が淵を呼び起こし、あなたの波、あなたの大波は、みな私の上を越えて行きました。

ヘルモン山の雪解け水が、最終的にヨルダン川に流れ込むこととなります。今、ヘルモンとヨルダンのことを話したので、水の形容によって鬱の状態を实によく言い表しています。大滝の下には、その水圧によって川底が深く抉りとられます。それと同じように、鬱の時は死の底に打ちつけられた思いになります。さらに、波の喩えをしています。連続的に襲ってきて、その留まるところを知りません。単に水の中にもがいているのではなく、水の深くにまで沈んでしまっている、という状態です。

42:8 昼には、主が恵みを施し、夜には、その歌が私とともにあります。私のいのち、神への、祈りが。

エルサレムから遠く離れている所においても、著者は祈りを捧げています。祈り、そして主への歌も捧げています。しかし、激しい落ち込みが襲ってくるのです。

42:9 私は、わが巖の神に申し上げます。「なぜ、あなたは私をお忘れになったのですか。なぜ私は敵のしいたげに、嘆いて歩くのですか。」42:10 私に敵対する者どもは、私の骨々が打ち砕かれるほど、私をそしり、一日中、「おまえの神はどこにいるか。」と私に言っています。

この骨々が打ち砕かれる程の誹りを受けています。その誹りに対して、「わが巖」と言って、主が自分を守られるように訴えています。

42:11 わがたましいよ。なぜ、おまえは絶望しているのか。なぜ、御前で思い乱れているのか。神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。私の救い、私の神を。

再び同じ言いまわしを、繰り返しています。これは歌なので、繰り返しもあります。そして 43 篇にも、同じ繰り返しがあります。そこで多くの人は、43 篇は 42 篇の続きであると言います。

2A 聖なる山への渴望 43

43:1 神よ。私のためにさばってください。私の訴えを取り上げ、神を恐れない民の言い分を退けてください。欺きと不正の人から私を助け出してください。43:2 あなたは私の力の神であられるからです。なぜあなたは私を拒まれたのですか。なぜ私は敵のしいたげに、嘆いて歩き回るのですか。

完全な鬱の状態から、少し回復の兆しが見えているのではないかと思われる一文です。それがどこから分かるかと言いますと、「裁いてください」という願いからです。42 篇では、敵の誹りに圧倒されているだけの自分でしたが、主の前に自分の思いを注いでおり、主に希望を置けと自分に言い聞かせている中で、怒りの感情が出てきました。相手が行っていることは、神を恐れないで行っていることであり、それは欺きであり不正であると見抜いているからです。

私は救われる前、高校生の時に抑鬱的でした。そして、イエス様を信じて救われてから、表面的にはクリスチャンらしからぬ感情が出てきました、これまでに感じたことのない怒りでした。それは、どこに持って行けばよいか分からないような怒りでした。なぜなら、「これまで親、学校、また大人の社会を信じてきたが、こんな大切な真理を誰一人教えてくれなかったではないか！」という怒りです。全くその通りで、神なしの教育は無に等しいです。最も大切なことが一つも教えられず、二の次、三の次にしてよいことに、何百時間も費やしたのですから。けれども、もちろん親も神について教えられなかったのですから、当然なのです。ですから親に対する怒りというより、漠然とした怒りでした。

43:3 どうか、あなたの光とまことを送り、私を導いてください。あなたの聖なる山、あなたのお住まいに向かってそれらが、私を連れて行きますように。43:4 こうして、私は神の祭壇、私の最も喜びとする神のみもとに行き、立琴に合わせて、あなたをほめたたえましょう。神よ。私の神よ。

著者は 42 篇よりも、さらに具体的に自分の渴きを言い表しています。神の光と真理によって、自分を導いてください。そして、「聖なる山、あなたのお住まい」というのはシオンの山のことです。ここには神殿があり、ゆえに祭壇があります。神の祭壇でいけにえを捧げ、そして神に楽器をもってほめたたえたいと言っています。新約の時代には、イエス様がサマリヤの女に語られた言葉の通りです。「真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのように人々を礼拝者として求めておられるからです。(ヨハネ 4:23)」

43:5 わがたましいよ。なぜ、おまえは絶望しているのか。なぜ、御前で思い乱れているのか。神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。私の救い、私の神を。

こうして見ると、著者は鬱というものを、そのまま神にぶつけて、それで神の深みに飛び込んでいくという感じがします。世においては、鬱というものをいかに直すかということを目的にするので

すが、聖書においては、神は、鬱や落ち込みというものを丸ごと、神に近づくための機会としてくださっています。

使徒の働き 23 章 11 節に、主イエス様がパウロに語られた言葉があります。「その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかしたように、ローマでもあかしをしなければならない。」と言われた。」パウロは、自分が熱心なユダヤ教徒から、イエス・キリストへの信仰を持ちました。しかし主は彼を、異邦人への使徒とされました。けれどもパウロの中に、「私は彼らの気持ちが分かる。そこで命を捨てても、彼らに福音を伝えたい。」という願いがありました。そして彼はエルサレムにきました。ところが騒動が起こり、彼はユダヤ人の中でもみくちやにされました。そしてローマの千人隊長が彼を掴み出し、それでも彼がそこで語りたいたいというので、パウロはヘブライ語で彼らに福音を伝えました。ところが、彼らは途中で怒りだしました。全くの失敗です。これまで心に温めていた、彼らに対する証しは全く効果なく、失敗に終わったかのようにでした。

パウロにとって、その宣教活動の中で最も暗い時だったかもしれません。彼の心では決して整理できていなかったでしょう。その時に主イエス様が共におられて、「勇気を出しなさい。」と言われたのです。そしてエルサレムで証しをしたことが失敗だったとは決して言わずに、むしろ、「エルサレムで証ししたように、あなたはローマでも証ししなければならない。」と励まされたのです。もしパウロがこの落ち込みを経験していなければ、主イエス様が隣におられるという経験はしなかったことでしょう。このように人生の暗い時期は、真実にイエス様に会える時になりえます。

3A 立ち上がろうとする者たち 44

44 篇も、基本的に 42-43 篇と背景が似ています。けれども 43 篇よりもさらに、義への飢え渇きが強くなっています。バビロンの地において、残された民が主に立ち返ろうとしているのに一向に状況が改善されない、その葛藤を主に打ち明けています。

1B 昔の偉大な御業 1-8

44 指揮者のために。コラの子たちのマスキール 44:1 神よ。私たちはこの耳で、先祖たちが語ってくれたことを聞きました。あなたが昔、彼らの時代になさったみわざを。44:2 あなたは御手をもって、国々を追い払い、そこに彼らを植え、国民にわざわいを与え、そこに彼らを送り込まれました。

彼らが思い出しているのは、ヨシュア時代のことです。ヨシュア率いるイスラエルの民が、カナン人に対してことごとく勝利を収め、その土地を自分たちのものとしていきました。けれども、ヨシュア記を見れば分かるように、それはまったく神ご自身が行われたものでした。彼らは進撃しましたが、あくまでも主ご自身が戦ってくださったからこそ打ち勝つことができています。

44:3 彼らは、自分の剣によって地を得たのでもなく、自分の腕が彼らを救ったのでもありません。

ただあなたの右の手、あなたの腕、あなたの御顔の光が、そうしたのです。あなたが彼らを愛されたからです。

なんとすばらしい御言葉なのでしょう。神がもつぱら彼らを愛しておられたから、これらのことを行なわれたということです。彼らが正しいから彼らの味方をされたのではありません。神は、私たちを恵みによって、信仰によって正しいとみなし、恵みによって私たちの味方になってくださいます。

44:4 神よ。あなたこそ私の王です。ヤコブの勝利を命じてください。

非常に大事な点です。これを詩篇の著者は念頭に入れて、後で主への訴えをしていきます。主は、彼らにとって王なのです。他の国々は人間を王として受け入れています。けれども、イスラエルについては、神ご自身が王なのです。けれども、後にイスラエルは人間の王がほしいとサムエルに要求しました。そしてサウルが立てられました。けれどもサウルを退け、神はダビデを選びました。そしてダビデの世継ぎの子がとこしえに治めることを約束されました。神はダビデの子によってご自分の国を立てられることを約束されました。けれども、そのダビデの王座がバビロンによって取られたというのが、著者の訴えていることにつながります。

44:5 あなたによって私たちは、敵を押し返し、御名によって私たちに立ち向かう者どもを踏みつけましょう。44:6 私は私の弓にたよりません。私の剣も私を救いません。44:7 しかしあなたは、敵から私たちを救い、私たちを憎む者らはずかしめなさいました。44:8 私たちはいつも神によって誇りました。また、あなたの御名をとこしえにほめたたえます。セラ

彼らにとって、神を誇りたいからこそ、神が戦ってくださる先祖たちの話を強く信じて、それを願っていました。

2B 物笑いの種 9-19

44:9 それなのに、あなたは私たちを拒み、卑しめました。あなたはもはや、私たちの軍勢とともに出陣なさいません。

バビロンに捕えられた民は、その残りの者たちは、自分たちの時代にそのような神の御業を見ることはありません。

44:10 あなたは私たちを敵から退かせ、私たちを憎む者らは思うままにかすめ奪いました。44:11 あなたは私たちを食用の羊のようにし、国々の中に私たちを散らされました。44:12 あなたはご自分の民を安値で売り、その代価で何の得もなさいませんでした。44:13 あなたは私たちを、隣人のそしりとし、回りの者のあざけりとし、笑いぐさとされます。44:14 あなたは私たちを国々の中で物笑いの種とし、民の中で笑い者とされるのです。44:15 私の前には、一日中、はずかしめがあ

って、私の顔の恥が私をおおってしまいました。44:16 それはそしる者とののしる者の声のため、敵と復讐者のためでした。

これらのことが、神によって行われたとする彼らの言い分には、立派な根拠があります。主は申命記で、モーセに対して主に背いたのなら、これこれ、こうなるのだということを語られました。それらのことが、まさしく彼らの上に臨んだというのが真実です。そして残りの民もそのことを意識しています。だから、確信をもって自分たちがそうになっているのは主が行われているからだ、と語っているのです。

44:17 これらのことすべてが私たちを襲いました。しかし私たちはあなたを忘れませんでした。また、あなたの契約を無にしませんでした。44:18 私たちの心はたじろがず、私たちの歩みはあなたの道からそれませんでした。44:19 しかも、あなたはジャッカルに住む所で私たちを砕き、死の陰で私たちをおおわれたのです。

ここに、残りの民の不満が書かれています。主に立ち返ろうとしており、主の名を否定せずに生きているのに、それでも自分たちの状況が変わらないという訴えであり、不満であります。「義に対する報い」を見ることができない不満です。イエス様が私たちに約束されました、「義に飢え渴いている者は幸いです。その人は満ち足りるからです。(マタイ5:6)」しかし、自分にはその報いが見えないということです。

黙示録に、同じような訴えをしている人々が登場します。すでに殉教して天において休んでいる魂であります。「小羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てたあかしのために殺された人々のたましいが祭壇の下にいるのを見た。彼らは大声で叫んで言った。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」(6:9-10)」彼らに報いが与えられるのは、患難期の後半、主が獣の国に対して災いを下される時です。それまで待ちなさいと主は言われました。

3B 主にへばりつく懇願 20-26

44:20 もし、私たちが私たちの神の名を忘れ、ほかの神に私たちの手を差し伸ばしたなら、44:21 神はこれを探り出されませんか。神は心の秘密を知っておられるからです。

もう一度、主に懇願しています。彼らはもし、自分たちが不義の中にいるのであれば確かに、神のことばが語った通り、物笑いの種になっても構わない。けれども、私たちがあなたを忘れていないと訴えています。

44:22 だが、あなたのために、私たちは一日中、殺されています。私たちは、ほふられる羊とみなされています。

この御言葉は、使徒パウロによって引用されています。しかし、パウロはこの著者と、まるで違った結論を出しています。「私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。(ローマ 8:35-37)」キリストにある神の愛から、誰も、どんなものも引き離すことは決してできないと断言しています。ゆえに、これらの中にあっても、それらは神のご計画に従って、すべてのことが益として働いていると信じていました。

44:23 起きてください。主よ。なぜ眠っておられるのですか。目をさましてください。いつまでも拒まないでください。44:24 なぜ御顔をお隠しになるのですか。私たちの悩みとしいたげをお忘れになるのですか。44:25 私たちのたましいはちりに伏し、私たちの腹は地にへばりついています。44:26 立ち上がって私たちをお助けください。あなたの恵みのために私たちを贖い出してください。

這いつくばるようにして、主に訴えています。ここで彼らが願っているのは、自分たちが主に立ちあがっているのだから、主ご自身が立ち上がってほしいということです。これは、イエス様が再臨することを意味しています。イエス様は今、神の右の座に着いておられます。けれども、いつまでも座っているではありません。この世に悪がはびこり、不正が積み上がっていく中で、父なる神がお定めになっている時に戻ってこられます。そして、この世にある悪に対して戦われて、悪を滅ぼしていただきます。その時が来る時まで、待たなければいけません。

しかし、その時が来るまで使徒パウロのように、信仰によって勝利することができます。すべてのことは、神を愛する者たちのためには益として働いてくださっているということを知っているので、主を耐え忍んで待ち望むことができます。けれども、その時が来るのを待つときに、ここの詩篇の著者のようにその信仰が試されるのです。

主と共に歩んでいるのに、帰って状況が悪くなったように見える人は、聖書の中にも出てきます。ヨセフがそうでした。彼は兄たちによってエジプトに売られましたが、そこで主が共にいてくださり、ポティファルの家は栄えました。ところが、彼の妻がヨセフに言い寄りました。それでヨセフがそれを拒むと、妻はヨセフが自分を襲おうとしたと偽って訴えました。それでヨセフは牢屋に入れられました。そこでも、ヨセフに主が共におられ、彼は看守の務めを任されるほど看守の長に信頼されたのです。そして、そこに入ってきたパロに仕える者たちのために、夢を解き明かしました。しかし、その一人献酌官は、ヨセフのことをすっかり忘れてしまい、パロ自身が夢を見るまで、二年間そこにずっといたのです。

正しいことをしているのに、報われないどころかかえって悪いことが起こります。けれども、そこで忍耐が必要です。ヨブも試されました。彼は神を呪うことしませんでした、自分の潔癖を主張し

たため、神以上に自分の義を論じていってしまいました。そこで彼の誤ったことは、神は神であられ、自分はいくまでも人間であること、神に主権があり、自分は服さなければいけないことを忘れてしまったのです。

実は、詩篇の著者の背景である、バビロン捕囚の残りの民にも同じことが起こりました。彼らは、異邦人の虐げの中で律法に立ち戻ろうとしました。それで律法学者エズラの下で、モーセの律法を厳格に適用しようとする動きが始まりました。そして、時を経て彼らはますます、自分たちを律法によって壁を作って、異邦人から分離しようとしていました。それがますます、異邦人からの反発を買い、迫害を受けるようになりました。そこでパリサイ人がいるのです。神のためにしていると思っていたことが、かえって神に反することをしていたというのであるから、本当に皮肉であり、辛いことであります。

ですから、私たちは神の愛に留まることを、強調しすぎることはありません。キリストにある神の愛にいるからこそ、神を信じることができ、希望を抱くことができます。

4A 王の麗しさ 45

そして 45 篇は、一気に王国時代に移ります。42-43 篇が神から離れたところにいる、残された民の苦悩が書かれており、44 篇は神に立ち返ろうとしている民の姿を描いていますが、45 篇はついに主ご自身が王として君臨している姿を描いています。先ほど、「神よ。あなたこそ私の王です。(44:4)」と告白したことが、その通りになるのです。

1B 王の尊厳 1-9

45 指揮者のために。「ゆりの花」の調べに合わせて。コラの子たちのマスキール。愛の歌 45:1 私の心はすばらしいことばでわき立っている。私は王に私の作ったものを語ろう。私の舌は巧みな書記の筆。

これから、王がたたえられる歌を書きます。この背景には、ダビデの子ソロモンの姿があります。けれどもソロモンには、必ずしも合致しない描写もあります。ソロモンを背景としつつ、ソロモンの指し示す平和の君キリストを表しています。

45:2 あなたは人の子らにまさって麗しい。あなたのくちびるからは優しさが流れ出る。神がとこしえにあなたを祝福しておられるからだ。45:3 雄々しい方よ。あなたの剣を腰に帯びよ。あなたの尊厳と威光を。45:4 あなたの威光は、真理と柔和と義のために、勝利のうちに乗り進め。あなたの右の手は、恐ろしいことをあなたに教えよ。45:5 あなたの矢は鋭い。国々の民はあなたのもとに倒れ、王の敵は気を失う。

王には、剣があり、また鋭い矢がありますが、その姿は柔和さが特徴となっています。一言で言

い表すなら「美しい」ということであり、唇から優しさが出ています。けれども、この方は弱いではありません。国々を制するために剣を持っておられ、矢が飛び出ます。イエス様が再臨される時に、その口からは鋭い剣が出てきて、敵対する者どもをことごとく滅ぼしてしまわれます。

しかし、この方は暴力を主体とするのではなく、あくまでも真理と柔和と義によって勝利しておられるのです。残りの民は、先ほど主が速やかな裁きをしてくださることを願いましたが、確かに主は裁かれる方ですが、地道に真実を行われる中で正義を実現されます。それは遅々として進んでいないかのように見えます。けれども、必ず正義は果たされるのです。

45:6 神よ。あなたの王座は世々限りなく、あなたの王国の杖は公正の杖。45:7 あなたは義を愛し、悪を憎んだ。それゆえ、神よ。あなたの神は喜びの油をあなたのともがらにまして、あなたにそそがれた。

今、著者は王に対して「神」と呼んでいます。この奇妙な言葉について、ヘブル人への手紙の著者は聖霊に導かれて解釈をしています。「御子については、こう言われます。「神よ。あなたの御座は世々限りなく、あなたの御国の杖こそ、まっすぐな杖です。あなたは義を愛し、不正を憎まれます。それゆえ、神よ。あなたの神は、あふれるばかりの喜びの油を、あなたとともに立つ者にまして、あなたに注ぎなさいました。」(1:8-9)」この主語は「神」であります。父なる神ご自身が、御子について、「神よ。あなたの御座は世々限りなく・・・」と語られているのです。したがって、ここは、詩篇の著者が聖霊に導かれて、神ご自身が語っておられる言葉を書き記したか所であります。驚くことに、父なる神がキリストを神と呼んでいます。ここは、明確にイエスが神ご自身であることを教えている箇所です。

45:8 あなたの着物はみな、没薬、アロエ、肉桂のかおりを放ち、象牙のやかたから聞こえる緒琴はあなたを喜ばせた。45:9 王たちの娘があなたの愛する女たちの中にいる。王妃はオフィルの金を身に着けて、あなたの右に立つ。

8 節の描写は、ソロモンのそれです。そして 9 節もソロモンのことを話しながら、キリストご自身の話に移っていきます。キリストを花婿とする、花嫁、教会の姿であります。

2B 王の娘たち 10-17

45:10 娘よ。聞け。心して、耳を傾けよ。あなたの民と、あなたの父の家を忘れよ。45:11 そうすれば王は、あなたの美を慕おう。彼はあなたの夫であるから、彼の前にひれ伏せ。

ここでとても大事な、神からの問いかけがあります。自分の民と、父の家を忘れることです。覚えていますか、アブラハムが神につながる時に、父の故郷を離れなさいと命じられました。そして、モアブ人ルツが、このことを実践したことを覚えていますか？モアブの地から離れ、ベツレヘムに戻

ろうとする姑ナオミに対して、「あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。(1:16)」と訴えました。そして、モアブ人の家に戻るように言いつけたナオミの声を振り払って、彼女に付いていったのです。そのため、ルツは確かにここにあるように、美しさを持っていました。彼女の姑に対する忠誠をボアズが好いて、それでボアズがルツを自分の妻にすることを決めました。

これが、教会がキリストに対して持っている態度です。「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。(ルカ 14:26)」異なる神々を信じて、まことの神を知らない人々の家にあるその強い結びつきをキリストのゆえに切り離します。キリストのゆえに自分を捨てている魂は、美しいです。そして、キリストの花嫁はキリストを自分の愛する方としてしていると同時に、キリストを王としてあがめ、ひれ伏します。ソロモンの妻たちが、ソロモンを愛していると同時にソロモン王の前でひれ伏したように、キリストの前でもひれ伏すのです。

45:12 ツロの娘は贈り物を携えて来、民のうちの富んだ者はあなたの好意を求めよう。45:13 王の娘は奥にいて栄華を窮め、その衣には黄金が織り合わされている。45:14 彼女は綾織物を着て、王の前に導かれ、彼女に付き添うおとめらもあなたのもとに連れて来られよう。45:15 喜びと楽しみをもって彼らは導かれ、王の宮殿にはいって行く。

ソロモンの妻だということで、彼女は着飾られています。それと同じように、キリストの花嫁だということで、私たちが霊的に着飾られています。キリストの義を身にまとい、この方の香りを神の恵みのゆえに放ち、キリストの計り知れない富をこの土の器に収めています。そして、ソロモンの宮殿にこの娘たちが入っていきます。契りを結ぶためです。そして子を宿し、その子が王の子どもとなっていきます。

終わりの日に、主が私たちを引き連れて地上に戻ってこられます。けれども、その前に天においては、「小羊の婚宴」が開かれています。「私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚宴の時に来て、花嫁はその用意ができたのだから。花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。その麻布とは、聖徒たちの正しい行ないである。(黙示 19:7-8)」このようにして、婚宴の時を持つことができます。

45:16 あなたの息子らがあなたの父祖に代わろう。あなたは彼らを全地の君主に任じよう。45:17 わたしはあなたの名を代々にわたって覚えさせよう。それゆえ、国々の民は世々限りなく、あなたをほめたたえよう。

ソロモンの妻たちは、自分の息子が王の名を受け継ぐという名誉にあずかります。このようにして、ある意味で彼女たちも国を受け継ぐ者となっていくのです。そして、ダビデの世継ぎの子に対して、国々がその国についていくようになります。つまり、キリストが統治されて、他の国々もこの

方をほめたたえるのです。ところで妻たちも、ある意味で共に受け継ぐという考えは、霊的にも、キリストの花嫁とされた者たちは、キリストにあって共同相続人となります。「もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人です。(ローマ 8:17)」

しかし、この引用したローマ 8 章にある約束は続きがありまして、「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、とるに足りないものと私は考えます。(18 節)」とあります。つまりキリスト者も、キリストの花嫁として今の時代、苦しみ、義に報われない生活を歩んでいるということです。むしろ、ますますその反対の方向に進んでいるような無力感を抱くのです。しかし、柔和な者は幸いなのです、必ず地を受け継ぎます。自分のしていることがいかに小さく見えても、報われていないように見えても、神のご計画の中では、真理と柔和と義の王であるキリストがすべてを益として働かせてくださっているのです。その愛の注ぎかけがあります。

ですから、ストレスの多い、神から離れていると感じさせるものの多い、神はいないと言い張るこの世に私たちは生きています。キリスト者と言えども、いや、キリスト者であるからこそ感じる落ち込みや鬱があります。こうした者に対して、神を待ち望めという命令がありました。そして、主が報いてくださる約束があります。